

中世末から近世初頭の善光寺門前町

笹本正治

The Zenkōji Temple Town from the End of the Medieval Period to the Beginning of the Early Modern Period

はじめに

- ① 中世の善光寺町
 - ② 善光寺の甲府移転
 - ③ 海津城と長沼城
 - ④ 空き寺時代の町
 - ⑤ 復興する町
- おわりに

【論文要旨】

長野市は善光寺の門前町としてつとに有名であるが、本稿では中世末から近世初頭にかけて、その実態を探る。

善光寺門前は中世を通じて町として発展を遂げたが、永祿元年（一五五八）に善光寺本尊以下が武田信玄によって甲府に運ばれ、僧侶や職人・商人までが甲府に移った。善光寺が甲府に移転してから、善光寺平では海津城と長沼城が地域の拠点となり、そこに城下町が形成された。本尊が移った善光寺門前町は衰退し、地域の経済的な中心地も海津・長沼の両城下町に移った。豊臣秀吉の手によって善光寺の本尊が信濃に帰されたのは慶長三年（一五九八）であった。四〇年以上も本尊がおらず、門前町としての実態を失っていた地域が、再び門前町になったのである。これから以降急速に善光寺門前町は宗教都市・宿場町として、政治権力とは関係なく復興・発展し、再び北信濃の経済的な中心地としての役割を帯びた。この間、門前町を形成するために政治

的な命令がなされたわけではなく、職人や商人などが自らの意志で集まった。一方、信玄によって築かれた海津城は近世に松代城となったが、その城下町も政治的な都市として発展した。

中世都市は人々が自由に集まったとされ、自治などが問題とされるのに対し、近世都市ではややもすると城下町が典型とされ、領主権力による町の成立やその統制だけが論じられる。ところが、善光寺門前町は政治的に町人が集められたわけではなく、人々が勝手に集まり、その後もいわば自治都市の側面を強く持っていた。近世都市でもこのような町人の側に主体があった都市が多く存在したはずで、今後は多様な都市のあり方を考えていく必要がある。また、中世から近世への断絶を強調するのではなく、両者の連続面にもっと目を向けねばならない。